

『長恨歌（抄）』白居易

漢皇重色思傾国

御宇多年求不得

楊家有女初長成

養在深閨人未識

天生麗質難自棄

一朝選在君王側

迴眸一笑百媚生

六宮粉黛無顏色

「長恨歌（ちようごんか）」

漢皇色を重んじて傾国を思ふ
かんこう おもんじてけいこく

御宇多年求むれども得ず
ぎようたねんきゆう えず

楊家に女有り初めて長成す
ようか むすめ

養はれて深閨に在り人未だ識らず
しんけい ありひといま

天生の麗質自ら棄て難く
てんなま れいしつみずか すてがたく

一朝選ばれて君王の側に在り
いっちようえらばれてきみおう かたわら

眸を迴らし一笑すれば百媚生じ
ひとめ いらしやう ひゃくびしやうじ

六宮の粉黛顔色無し
ろつきゆう ふんたいがんしよく

『香炉峰下新卜山居草堂初成偶題東壁』白居易

日高睡足猶慵起

小閣重衾不怕寒

遺愛寺鐘欹枕聽

香炉峰雪撥簾看

匡廬便是逃名地

司馬仍為送老官

心泰身寧是歸処

故郷何独在長安

香炉峰下新たに山居を卜し 草堂初めて成りたまたま東壁に題す

日高く睡り足れるも猶起くるに慵しものじ

小閣衾を重ねて寒さを怕れずしよらうこつふすま かさ さむ おそ

遺愛寺の鐘は枕を欹そはだてて聴きき

香炉峰の雪は簾すだれを撥かかげて看みる

匡廬きよらうは便すなわち是れ名こを逃めいるの地のが

司馬しばは仍なお老おいを送おくるの官かんと為なす

心泰こころゆたかに身寧みやすきは是れ歸こ処きしよ

故郷ふるさと独ひとり長安ちやんしあんにのみあらんや

『春晓』 孟浩然

春眠不覺曉

しゅんみんあかつき おほ
春眠 曉 を覚えぬ

处处聞啼鳥

しよしよていちやう
处处啼鳥を聞く

夜来風雨声

やらい
夜来風雨の声

花落知多少

花落つること知る多少ぞ

『春望』 杜甫

国破山河在

国破れて山河在り

城春草木深

城春にして草木深し

感時花濺淚

時に感じては花にも涙を濺ぎ
そそ

恨別鳥驚心

別れを恨んでは鳥にも心を驚かす

烽火連三月

ほつかさんげつ
烽火三月に連なり

家書抵万金

かしょばんきん あた
家書万金に抵る

白頭搔更短

はくとつか
白頭搔けば更に短く

渾欲不勝簪

すべ しん た
渾て簪に勝へざらんと欲す

『早発白帝城』李白

つと
早に白帝城を発す

朝辞白帝彩雲間

あした
朝に辞す 白帝 彩雲の間 かん

千里江陵一日還

千里の江陵 一日にして還る うちかへ

兩岸猿声啼不住

えんせい
兩岸の猿声 啼いて尽きず

輕舟已過万重山

けいしゅう すで
輕舟 已に過ぐ ばんちよう
万重の山

『楓橋夜泊』張繼

月落烏啼霜滿天

からす
月落ち烏啼いて霜天に満つ

江楓漁火对愁眠

こうふうぎよかしゆうみん
江楓漁火愁眠に對す

姑蘇城外寒山寺

こそ
姑蘇城外の寒山寺

夜半鐘声到客船

やはん しょうせいかくせん いた
夜半の鐘声客船に到る

『春夜』蘇軾（そしよく）

春宵一刻值千金

しゅんしやういつこくあたいせんぎん
春宵一刻值千金

花有清香月有陰

せうじゆ
花に清香有り月に陰有り

歌管楼台声細細

かかんろうだいいえさいさい
歌管楼台声細細

鞦韆院落夜沈沈

しゆうせん いんらくよるちんちん
鞦韆院落夜沈沈